

古代鉄のルーツにつながる鉄の国「豊（豊前・豊後）」臼杵石仏を作らせたのは炭焼き長者 ???



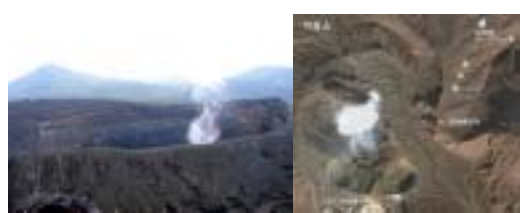
大分県「古代 豊（豊前・豊後）の国」ツアーマップ 2006. 6. 4. -5. 宇佐八幡宮と臼杵石仏



朝焼けの由布岳



久住山



阿蘇山 火口東壁（仙酔峡）

梅雨時 雨が心配された6月4日と5日でしたが快晴。 大学時代の仲間約20名弱の九州での同窓会九州の仲間が準備万端整えてくれ、小倉から臼杵・湯布院・阿蘇を訪ねる1泊2日のバスツアーまさに学生気分に戻ったの修学旅行である。

古き石仏を訪ね 湯布院の湯と宴会 そしてやまなみハイウェイを走って阿蘇の火口へのハイキング 仲間と2日眠いっぱい楽しんだ旅 そして 計画してくれた仲間に本当に感謝です

九州から帰って 訪れた所を見ながら整理を始めて ふっと気がつきました。

みんなとしゃべったり 飲んだりする事に気がいっぱい 全く頭にも浮かばなかったのですが、訪れたところは古代の鉄の国 豊（豊前・豊後）の国。

しかも 訪れた宇佐神宮 臼杵大仏がそれぞれ古代日本への鉄の伝来とかかわりを持っている。

宇佐神宮はひょっとして・・・とは思っていましたが、臼杵石仏が和鉄の道にかかわるなど全く思いも寄らぬこと・・・・・・・・

鉄の伝来に大きな役割を果たしたに違いないと思いつつも 良く知らなかった豊の国

しかも 一緒に出かけた仲間が 大学で金属を学んだ仲間の同窓会ツアー

計画してくれた仲間はそれを知って繋いでくれたのでしょうか・・・・

本当に帰ってきてから知ったビックリです。

同窓会の楽しさとは別に、帰って調べた「和鉄の道 古代 豊の国」としての訪問記を付け加えて

『九州の旅 - 九州 豊の国から阿蘇へ -』としました。

- 参考 ◆ 長嶺正秀著「筑紫政権から大和政権へ 豊前石塚山古墳」
 ◆ Country Walk IV
 山岳宗教の歴史を秘めた霊峰 英彦山
<http://mutsu-nakanishi.web.infoseek.co.jp/pdfwalk/4walky01.pdf>
 ◆ 和鉄の道V-3
 鉄の6世紀 北九州の装飾古墳に和鉄の道を重ねて
<http://mutsu-nakanishi.web.infoseek.co.jp/iron/5iron03.pdf>
 ◆ 司馬遼太郎著 「街道をゆく 中津・宇佐のみち」

1. 九州の旅 アルバム - 豊の国から阿蘇へ - 2006.6.4.-6.5.

1.1. 豊前 宇佐神宮 -古代から謎の多い宇佐神宮-



八幡神社の総本宮 宇佐神宮 2006.6.4.

小倉から高速道路新しく出来た北九州空港で東京からの仲間を加えて1時間ちょっとで八幡神社の総本宮宇佐神宮。予備知識は和気清麻呂と弓削道鏡のご神託事件の由緒ある神社程度である。

中央構造線が九州に上がって福岡との県境を貫き、海岸まで山々が迫る大分県。小さな平野がぼつぼつと海岸にへばりついている。そんな山々にへばりついた小さな平野 宇佐の山裾の緑の中に広大な境内を持つ宇佐神宮がありました。

緑の山の中に真っ赤な鳥居 そして、山裾から山中に少し分け入ったところに華麗な本殿を有する上宮・下宮を持つ神社で、山裾の参道へ上がってゆく手前の広い境内にはかつて神宮寺の壮大な伽藍が立ち並んでいたという。

祭神は、一之御殿の八幡大神（御名：誉田別尊（応神天皇））、二之御殿の比売大神（御名：三女神（さんじょしん）＝多岐津姫命（たぎつひめのみこと）、多岐理姫命（多紀里比女命）（たぎりひめのみこと）、市杵嶋姫命（いきしまひめのみこと））、三之御殿の神功皇后（御名：息長帯姫命）の三神を祭る。

また 御許山には、宇佐神宮の大元神社があるが、本殿はなく山そのものが御神体という自然信仰の残る山となっている。



宇佐神宮の鳥居周辺



時の宇佐神宮（神宮寺）伽藍配置図

当初は新羅から豊の国に渡来してきた精錬・鍛冶技術集団秦氏と強く結びついた神社であつたと考えら

れており、また、宗像大社の祭神でもある比売大神を祭ることなどから海人族との関係もある。
渡来神などこの地の土着の信仰が深く結びつき、この宇佐神宮を信奉する技術集団の技術などを通じて、古代大和王権と密接につながっていったと考えられている。

また、この過程で渡来仏教とも深く結びつき、日本で最初の神仏集合の大伽藍を持つ大神宮寺となった。
大和王権と結びつき、国家守護の神社となって、有名な弓削の道鏡事件や 奈良の大仏鑄造に関する神託など神託を通じて 古代大和王権の政治とも深く関ってゆく。朱塗りの壮麗な本殿と緑の森は京都の数々の神社で知ってはいるのですが、境内の大きさと山麓の自然と一体となった神宮には京都にない雰囲気と風格が備わっており、そのベースに上記したような大和王権との繋がりを強く感じました。

1.2. 豊後 臼杵石仏 2006. 6. 4.



臼杵大仏のある谷 全景 2006. 6. 4.



臼杵大仏 2006. 6. 4.

宇佐神宮から九州自動車道に乗って国東半島を横切ると左手に別府湾 右手に由布の峰々を見ながら南へ。

別府湾岸からそびえる大分市の高崎山をトンネルでくぐるとまもなく臼杵である。宇佐から約1時間 バスツアーなので、地図の感覚がまったくないまま宇佐から約維持間弱で臼杵石仏の入り口に到着。

緑につつまれた谷間の集落でちょうど巾着状にぐるりと丘陵地が取り囲み真中に草地が広がっていて、その丘陵地に沿って 穂ツホつと集落が見え、草地には花が咲き乱れ、素晴らしい田園風景。



臼杵大仏のある臼杵市深田の郷 2006. 6. 4.

この谷間の入り口の直ぐ右手の丘陵地が崖の枝谷になっていて崖に沿って少し登ったところから、ぐるりと谷を囲んで臼杵の石仏群が続いている。

山中にぼろぼろになって風化して 取り残されているイメージが頭の中にあったのですが、周囲一面緑の谷筋石仏のある崖に鞘屋根が掛けられ、静かな雰囲気の中できっちりと守られているのにビックリ。

本当に印象的でした。

また、首だけのあの有名な石仏があるはずと見るのですが、見当たらず。

よく聞くとこの石仏群が国宝に指定され、整備された時に 賛否両論ある中で 元の仏様の姿に戻したということでした。その仏様の堂々とした姿もありました。

日陰になるこの崖には緑のコケが張り付いて、それがさらに石仏に陰影をつけ、崖にさす光線によって 右から見るのと左から見るのとで表情を変える姿にしばし 見とれていました。

じっくり 石仏のある谷ほめぐって 1 時間 ふっとたたら山郷の光景が頭をよぎったのですが、この郷がたたら製鉄と関係の深い炭焼き長者の郷とは帰って調べるまで露知らず。

一度行って見たかった臼杵の石仏にじっくり出会ってきました。



谷の崖にある臼杵石仏を巡る遊歩道 建物は石仏の鞘屋根 2006. 6. 4.



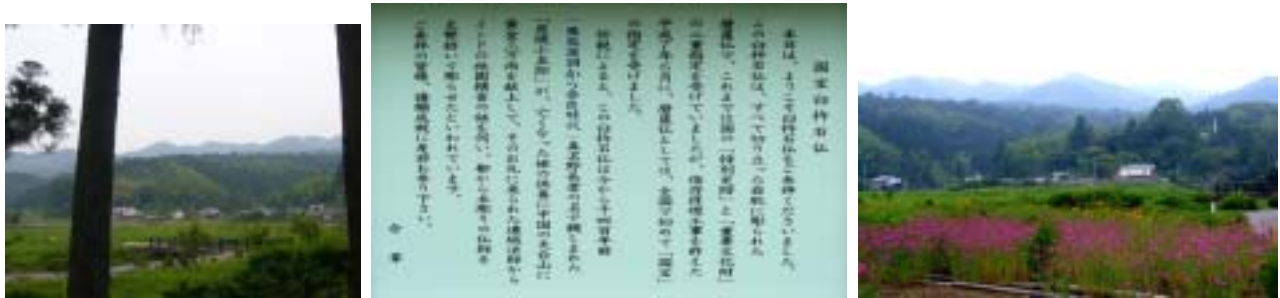
臼杵石仏 I



臼杵石仏 II

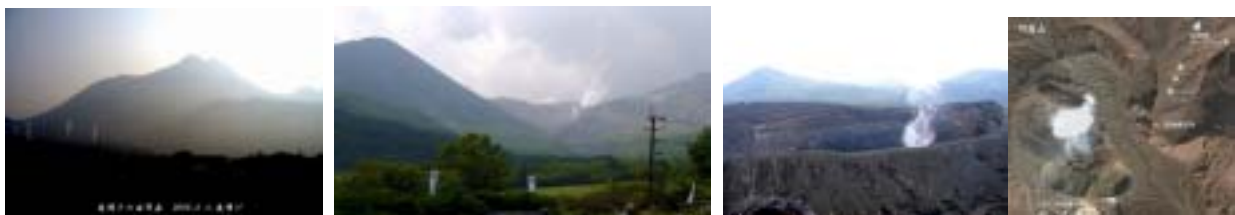


臼杵石仏 I



参詣道より 石仏の郷深田 国宝 臼杵石仏の案内板 石仏群入り口より深田の郷
 この石仏群の発願社として「炭焼き小五郎・真名野長者」の名が見える
 炭焼き長者伝説のあるところに「たたら」あり

1.3. 由布院からやまなみハイウェイを通過して 阿蘇火口東側壁展望台 2006. 6. 5.



朝焼けの由布岳 久住山 阿蘇山 火口東壁（仙酔峡）

湯布院温泉に泊まって、夜の宴会そしてサッカー・学生時代の写真をビデオに仲間が作ってくれたのをさか
 かに昔を語って・・・・・・・・

早朝 朝霧の中 湯煙が昇る由布院の街の背後にそびえる由布岳から朝日が昇る。今日も晴れ。
 ひよっとしたらミヤマキリシマがどこかで見られるかも・・・の期待を持ちながらやまなみハイウェイを九重
 から阿蘇へ

残念ながら、昨年来の異常気象の影響を受けて ミヤマキリシマは九重ではまだ早く 阿蘇の仙酔峡ではす
 でに終りでした。でも思いもかけず、雄大な阿蘇五岳の展望 そして荒々しい阿蘇の火口壁と噴煙に昔修学旅行で
 来た時を思い出しながらの雄大な阿蘇火口壁（東側火口壁展望台）へのハイキング。
 豪快に噴煙をあげる阿蘇はやっぱりいい。すごい 九州一の山・・・・・・・・と。



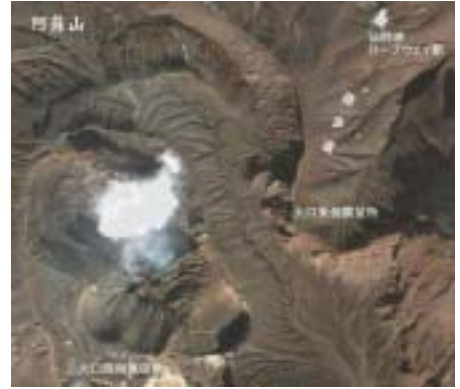
由布の朝



久住山 長者原 2006. 6. 5.



阿蘇山火口 火口東側展望所より 2006. 6. 5.



阿蘇山火口の衛星画像



西側壁展望所・草千里を望む



東側火口壁展望所より火口を望む



仙酔峡ロープウェイ駅から東側火口壁展望所への遊歩道



阿蘇山火口東壁から主峰中岳・高岳へと続く稜線と東側火口展望所



2006. 6. 5.



本当に気心の知れた仲間でのバスツアーの楽しさ
 修学旅行気分ではしゃぎました
 阿蘇から九州自動車道を博多に戻って博多・小倉で次回を
 約して散会
 一人気まま旅とはまた違った楽しみに酔った2日間でした
 まあ よう こんだけ役者が揃っているわあ・・・と
 山口厚狭駅に帰り着くと九州 に沈む夕日がきれいでした

2006. 6. 5. 夕 Mutsu Nakanishi

2. 古代 豊の国と和鉄の道

宇佐神宮・臼杵石仏は畿内大和と結びついた渡来の製鉄集団が残した足跡

古代 豊の国は瀬戸内海の西の端に面し、大和が九州の勢力を抑え 朝鮮半島と大和を結ぶ交流の拠点としたところであり、また、東西に四国北岸を貫いてきた中央構造線がこの豊の国を貫く、九州有数の花崗岩地帯で、豊富な鉱物資源があり、背後にはどっしりと英彦山が座っている。

博多を中心とした九州文化圏が大陸・朝鮮半島ととの交流により、新しい文化を育て、邪馬台国・大和に並ぶ勢力を持つ国を形成していったのは少し違って、大陸・朝鮮半島を結ぶ大和の拠点として 畿内・瀬戸内勢力と深く結びつくことにより、文化を育んできたところである。

また、後背の山には豊富な鉱物資源が山中にあり、朝鮮半島から日本へ伝来してきた鉱山技術・鍛冶技術が一番先に経由する場所であり、多くの渡来人たちがこの地で渡来の新技術を育み、畿内へそして、日本各地へ伝播させていったという。

そんな渡来の技術集団が残していった足跡が宇佐神宮や臼杵の大仏として残ったと言われる。

2.1. 豊の国は大和が九州勢力を排して 大陸・朝鮮半島と交流する拠点



紀元前1世紀頃の北九州の「国々」
 伊都国や奴国など玄界灘に面した国々が
 大陸・朝鮮半島と活発な交流



西日本における3世紀出現期の主要前方後円墳分布
 大和から瀬戸内・北九州に分布
 なかでも豊の国に畿内の大王に匹敵する大型前方後円墳が出現

弥生の終末 1世紀後半以降 邪馬台国の時代 北九州では、朝鮮半島諸国との交流をする新しい国々が興ってきた。その交流の中心は「鉄」であり、魏志東夷伝 弁辰条には朝鮮半島南部の弁辰の地が「国出鉄、韓・濊・倭、

皆従取之」(西暦 286 年) と記されている。



また、邪馬台国の卑弥呼が魏に使いを送ったのもこの頃である。(西暦 239 年) 古墳時代の始まる日本黎明の時代である。

当時日本では鉄が生産されず、全量大陸や半島に依存していた鉄文化の揺籃期でこの鉄を支配したものが勢力を伸ばしてゆく時代である。朝鮮半島に勢力を伸ばしていた「漢」が滅亡し、半島諸国の勢力バランスも崩れ、日本においても北九州勢力が衰え 邪馬台国・大和連合政権が大陸・朝鮮半島の覇権を握り台頭してくる。その大和勢力が朝鮮半島との交流の拠点としたのが、豊の国である。

大和から瀬戸内海を通り、下関海峡を抜けて、玄界灘を吉岐・対馬を経て朝鮮半島に至る道のりの中、北九州勢力の中に入らず、かつ北九州を押さえる要で

あったろう。

大和は勢力化に入った諸国にそのシンボルとして 巨大な墳墓 前方後円墳の建設と三角縁神獣鏡が与えられている。この墳墓の建設には土木技術 鉄器製造の鍛冶技術なしには到底達成できず、これらの技術や鉄素材が支配層に供給されるネットワークが大和連合勢力の源としてさらに勢力を伸ばしていったと考えられている。

そんな初期の前方後円墳の分布を前ページの図に示した。



鉄の交易路瀬戸内を完全支配し、新しい技術・文化の窓口 九州を押さえてゆく道筋がよく見て取れる。

中でも豊の国(豊前)にある石塚山古墳は 3 世紀末に築かれ、全長約 130 メートル 後円部約 80 メートルの北九州最大最古の前方後円墳でその規模は畿内大和王権の墳墓に次ぐか匹敵する大きさで、十数面の三角縁神獣鏡を含め数多くの威信財を副葬しており、この地の首長の勢力の大きさと大和政権との関係の深さが判る。

また、宇佐神宮のある宇佐にも赤塚古墳などの前方後円墳群があり、この地の首長も大和との密接な関係にあったことがうかがえる。

時代はもう少し下るが、『隋書』倭人伝には渡来人秦氏についての記述がある。

608 年、遣隋使小野妹子が隋使・裴世清を伴い帰国した折に、裴世清は筑紫から瀬戸内海に入った時、中国人が多く住む「秦王国」の存在を知

らされたという。

「秦王国」とは秦氏が住んだ豊前と言われている。。

秦氏は、秦の始皇帝の血を汲む氏族で朝鮮経由で日本に渡来したと自称。この秦氏は金属精錬・鍛冶加工技術に優れ、養蚕や機織りなど半島の先端技術に長じており、開墾を進め、水田を広めるなど半島の新技术を日本に数多く広めた功績を持っている。

このように朝鮮半島との交流の中には大陸・朝鮮半島の戦乱を逃れ、日本にやってきた渡来の技術集団が数多くあり、それらの人達と一緒に、大和の国づくりを支えた。

特に渡来の金属加工技術集団がこの豊の国に居た事に注目する。



九州最大最古の豊前苅田町の石塚山古墳とその鉄製出土品

先に記したごとく、この豊の国の後背の山々は鉄・銅・金・水銀など数多くの鉱物資源を含む九州屈指の花崗岩地帯であり、また国東半島の海岸には砂鉄がある。渡来の技術集団がこの地にとどまった由縁であり、半島諸国との交流の中で、受け入れ窓口として さらにその技術を磨いていったと考えられ、鉄鍛冶の技術についても、増大する鉄需要への対処 鉄の自立生産をももくろんだに違いない。



北九州の鉱物資源地帯を育んだ花崗岩帯と砂鉄の分布図

秦氏というと機織集団のイメージが強く、金属精錬・鍛冶加工の技術集団というの特異に見えるが、そのルーツは新羅にいた技術集団といわれ、宇佐八幡の神も彼らが信奉する新羅の天日槍が大和の神と融合したとする説もある。また、宇佐八幡宮の由緒にある宇佐の神が鍛冶の翁となって現れたとの伝承や 奈良の大仏建立の際に宇佐の祭祀を行う大神氏が奈良に入り、鑄造にともなう諸問題を神託によってたびたび解決したとの伝承もこの係累に属する。

さらに後で記すが この豊後 国東半島の西の内陸側 三重には製鉄鍛冶伝承の典型といわれる「炭焼き小五郎」の原型である「真名野長者伝説」があり、この真名野長者が臼杵石仏を発願したと言われている。

このようにこの豊の国は出雲・吉備の製鉄地帯ほどの迫力はないが、古くからの産鉄・鉱物資源豊富な地であり、しかも朝鮮半島の新技术交流路の日本側窓口にあったことを考えると 常に新しい技術が一番に入る地であり、それらの技術をさらに取り込みつつ技術を高めてゆき、それが、大和王権を支える力になっていたに違いない。いまだに日本での鉄の自立生産が始まるルートが定かでないが、この豊の国の役割を見落としてはならないのではないかと思っている。

2.2. 宇佐神宮と朝鮮半島鍛冶集団との関係

宇佐神宮は全国に数多く存在する八幡神社の総本宮。

祭神は、一之御殿の八幡大神（御名：菅田別尊（応神天皇）、二之御殿の比売大神（御名：三女神（さんじょしん）＝多岐津姫命（たぎつひめのみこと）、多岐理姫命（多紀里比女命）（たぎりひめのみこと）、市杵嶋姫命（いきしまひめのみこと）、三之御殿の神功皇后（御名：息長帯姫命）の三神を祭る。また 御許山には、宇佐神宮の大元神社があるが、本殿はなく山そのものが御神体という自然信仰の残る山となっている。



宇佐神宮の由来

宇佐神宮の神格の起源については不明な点が多いが、本来は海神・鍛冶神・渡来系の秦氏の氏神など諸説があるが、この宇佐の地の土俗的な神だと考えられる。

● 宇佐八幡宮の所伝より

わが国に仏教伝来の頃（552年）の欽明天皇の29年に宇佐（現在の宇佐神宮境内）の菱形池のほとりの泉の湧く辺りに鍛冶をする翁や八つの頭を持つ龍が現れて、この姿を見た者は病気になったり死亡するなどの異変が起こった。

そこで、欽明天皇の32年（571年）、大神比義という修行者がこの祟りを治めようと、3年の間五穀を断って祈り神業を行っていたところ、菱形池のほとりに鍛冶の翁が小児の姿で現れて、「我は誉田天皇広幡八幡麻呂・名は護国靈験威力神道大自在菩薩なり」（「われは応神天皇（ホムタワケノミコト）である」と告げ、黄金の鷹になって駅館川東岸の松の枝の上にとどまった。

この翁の神童の霊（つまり黄金の鷹）のとどまった処にその村の長が、和銅元年（708）に鷹居社を造立し八幡神として祀ったのが八幡信仰の始まりといわれている。

そして霊亀2年（716）には小山田社に遷座、さらに神亀2年（725）に小倉山の丘陵（現在の亀山）に遷座し、壮大な社殿の造営が行われた。

その後、天平10年（738）、これまで境外にあった2つの神宮寺を小倉山境内移建し、宮と寺を一体化させた堂々とした伽藍を持つ「八幡宮寺」なる特異な様式を生み出した。

この小倉山は大分県は宇佐平野の中心部、御許山（おもとやま）の北北西の麓にあり、この一帯には、多くの古墳群が存し、古くから開けていた土地であることを示している。

このような由緒から、宇佐八幡宮は、古くから伊勢神宮に次ぐ「第2の宗廟」といわれ、全国に17社ある勅祭（天皇のお使いをお迎えする）の大社とされた。

745年に奈良東大寺で大仏の鑄造が始まったが、宇佐神宮の祭祀を司る大神氏が奈良に入り、鑄造にともなう諸問題を神託によってたびたび解決したという。

宇佐神の祭祀集団が最先端の金属加工技術を持っていたことをうかがわせる話である。これをきっかけに宇佐神が国家の重大事に関与することになり、弓削道鏡を退ける託宣を下したことがよく知られている。

この宇佐神は新羅から渡来した金属精錬・力時加工技術集団（一説には秦氏）が信奉する天日槍との関連が強く、鍛冶の翁出現の由緒も製鉄神の伝承によく似ており、奈良の大仏鑄造の話など鍛冶技術集団との結びつきが強いことをうかがわせ、この祭祀を勤めてきた大神氏も新羅からの渡来の秦氏系の氏族といわれる。

また、この地が大和と密接につながっていた事がこの宇佐神宮の由緒にもよく現れている。

『隋書』倭人伝には秦氏について次のようなことが記されている。

608年、小野妹子が隋使・裴世清を伴い帰国した折に裴世清は、筑紫から瀬戸内海に入ったとき、渡来帰化人の秦氏が住んだ豊前の地 中国人が多く住む「秦王国」の存在（渡来帰化人の秦氏が住んだ豊前の地と推測される）を知らされたという。

秦氏は、秦の始皇帝の血を汲む氏族で朝鮮経由で日本に渡来したと自称した。

この秦氏は金属精錬・鍛冶加工技術に優れ、養蚕や機織りなど半島の先端技術に長けており、開墾を進め、水田を広めるなど半島の新技术を日本に数多く広めた功績を持つ。（近江・山城・河内・摂津そして関東??）

また、仏教や道教の普及者でもある。

宇佐神宮（宇佐八幡宮）の最大の宗教行事は、6年に1度 神職たちが薦神社の池にやってきて真薦を刈ることである。この薦でつくられた枕が宇佐神宮のご神体（御験とも神座ともいう）とされ、八つの神社を巡幸するという。この行事にも新羅から渡来した金属精錬・鍛冶技術集団の持つ開墾・農業土木の姿が見える。灌漑設備の中心をなす池は神であり、この池にイネ科のまこも 真菰・真薦 が自生し、暮らしの必需品としてこれを刈りとりて編み、むしろなどにしたのだらうと司馬遼太郎も「街道をゆく一中津・宇佐のみち」の中で記している。これらの話が示すとおり、この豊の国に居た渡来の金属精錬・鍛冶技術を持つ技術集団が大和王権の覇権に重要な役割を演じた。その中心は半島の鉄の支配と鍛冶技術の展開であったらう。まさに鉄の道が日本を動かした時

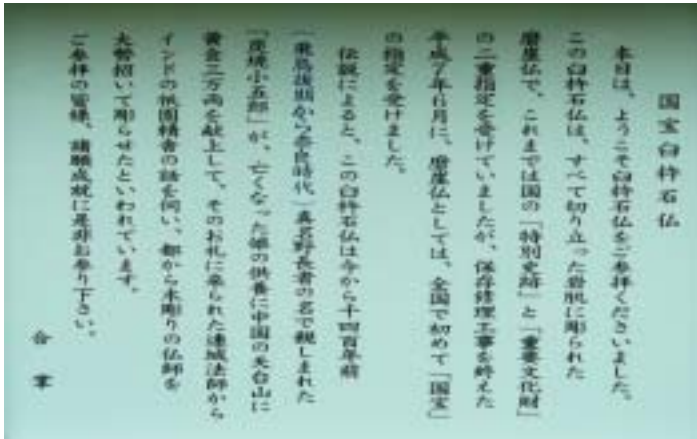
代であり、その日本側の窓口が豊の国であったと考えられる。

歴史の表舞台には現れてこないが、豊の国には数多くの渡来人などが上陸した国際都市で、その中心に宇佐神宮があったのかも知れない。

2.3. 臼杵石仏と真名野長者 - 製鉄伝承「炭焼き長者」 -



炭焼き長者伝説由来の臼杵石仏の郷 豊後 臼杵深田の郷と石仏群のある谷全景



臼杵石仏の発願者は誰か

臼杵へ行って、この発願者は真名野長者（炭焼き小五郎）であることを知りました。

「炭焼き長者」は日本各地に残る製鉄伝承。この伝承地は常に製鉄・鍛冶の痕跡が見える。

国東半島が砂鉄の浜であることは知っていましたが、その根元にある臼杵その有名な石仏の発願者が炭焼き長者。本当にびっくり出した。

◆「真名野長者伝説」

全国的に分布している 炭焼き長者譚 のもとになったともいわれる伝説。

大和朝廷の時代、都に、顔に醜い痣のある姫がいたが、仏のお告げに従って豊後国深田に住む炭焼き小五郎の許へ行き夫婦になる。

2人は数々の奇跡により富を得て長者となり、1人の娘が生まれた。

般若姫と名付けられた娘は都にまで伝わるほどの美女に成長し、1人の男と結婚するが、実はその男は都より忍びで来ていた皇子（後の用明天皇）であった。

皇子は天皇の崩御により都へと帰ることになったが、姫は既に身重であった為、「男の子が産まれたなら、跡継ぎとして都まで一緒に、女の子であったなら長者夫婦の跡継ぎとして残し、姫1人で来なさい」と告げて帰京してしまう。産まれた子供は女の子であった為、姫は1人で船に乗り都を目指す。途中嵐に会い周防国大島に漂着する。村人による介抱も虚しく数日後に姫は逝去してしまう。

姫の死を悲しんだ長者は中国の寺に黄金を送ると共に、深田の岩崖に仏像を彫らせた。

その仏像が現在も残る国宝臼杵石仏である。

平安時代後期から鎌倉時代にかけて造立されたといわれる 臼杵石仏。

これだけの石仏を造立した財源は何かということになる。

その発願者が真名野長者(炭焼小五郎)ということになれば、臼杵深田近辺には採鉱 冶金を業とする集団の存在がうかがえる。

この豊後の後背の山塊を挟んで西側の位置にある熊本県菊池川流域の疋田にも炭焼き長者「疋田長者」の伝承が残っており、この流域もまた渡来の精錬・鍛冶集団がいた土地でもある。



炭焼き長者伝説由来の臼杵石仏の郷 豊後深田

真名野長者は伝説上の人物であるが、平安時代末にこの地で権力を握っていたのは臼杵氏で、その経済力は銅・鉄などの採鉱 冶金によるといわれる。石仏の発願者が臼杵市である可能性は十分考えられ、それが、逆に真名野長者伝説を生んだのかも知れない。

本当に静かな山郷の緑に埋まる崖に彫られた磨崖仏 見る角度によって表情が変わり、また 見る人によってその表情を変えるのだろう。本当に静かな山郷の仏 激しい労働に明け暮れたたたら衆もこの石仏たちに心のよりどころを求めたのかもしれない。

本当に一度訪れたかった臼杵大仏の郷

それが 思いもかけず、たたらの里と石仏の里が重なって一層印象深いものとなりました。



国宝 豊後臼杵の石仏群 2006. 6. 4.

2. 4. 補足 大陸と大和を結ぶ古代の要衝 四国高縄半島で古代の製鉄遺跡が発掘された

豊の国を九州の前線拠点として大陸・朝鮮半島とを結ぶ大和の鉄の重要な交易路が瀬戸内海ならば、古い製鉄遺跡がこの交易路の途中にもあっていいはず。

でも、四国には いまだ 古い製鉄遺跡はみつかつていないし、三原・吉備まで見当たらない。

豊の国にも古い製鉄遺跡はないのか・・・・・。

そんな事を考えていた 6月25日届いた「発掘された日本列島 2006 新発見考古速報」によると昨年四国で初めて製鉄遺跡が発見されたと・・・・。

それも瀬戸内海の北岸の古代瀬戸内海交通の要衝 高縄半島に古い妙見一号古墳などの前方後円墳群がある愛媛県大西・今治周辺の地で、

詳細は不明ですが、弥生後期から古墳時代に掛けての複合遺跡である。

6世紀末から7世紀に遡る古代の製鉄遺跡が発見された(今治高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡)

そして、同じ丘陵地からは 詳細は不明ですが、鍛冶炉を持つ住居跡がいくか出土し、この丘陵地で古代製鉄・鍛冶加工の鉄作りがされていた。

また 豊の国では 6 世紀末の製鉄遺跡で箱型砂鉄原料の松丸 F 遺跡が資料に載っているが、詳細はわからない。まさに大陸・朝鮮半島から大和への鉄の道 瀬戸内海ルートの完成である。



古代遺跡が枝谷に並ぶ今治日高丘陵と道路整備の下に埋まる高橋佐夜ノ谷製鉄遺跡 2006. 7. 3.
四国で初めて古代の製鉄炉が発見 週への古代遺跡から鍛冶炉も・・・



初期の前方後円墳 今治市大西町 妙見山1号墳とそこから見る瀬戸内海 2006. 7. 3.
高橋佐夜ノ谷製鉄遺跡とは狭い高縄半島 高縄山塊の西山麓と東山麓の関係にある

博多から筑後川流域にかけての北部九州筑紫とはちょっとちがった展開を見せた古代 豊の国
豊の国は九州から畿内・大和への玄関口であり、古代からの謎の宇佐神宮もある。
初期大和王権は北九州筑紫を牽制して 大陸・半島への窓口を豊の国に置いたという。
また、豊の国の後背の英彦山は修験道の山であり、筑紫の国との境をなすこの山塊には豊富な鉱物資源があり、

この資源を背景に日本誕生に大きな影響を与えたに違いない。

同窓会のツアーでかけた豊の国について 調べてゆくうちに 古代大和王権の鉄支配の根源がこの豊の国の経営にあったように思えてきました。多くの渡来人や技術が「豊の国」を經由して畿内・日本各地に伝播したのではないか・・・日本での製鉄の開始につながる製鉄の新技术・日本各地で起こる大和鍛冶と韓鍛冶の技術の転換さらには韓鍛冶間の新技术の取り込み等々。

いまだによく判らぬ古代の製鉄技術の謎 そんなものも この豊の国を通過していったのか・・・

臼杵石仏を作らせた炭焼長者の伝説は山塊の西側菊池川流域の渡来鍛冶技術集団との関係を想起させ、宇佐神宮は古代渡来の鉄鍛冶技術や鉄素材を支配した大和・三輪王権・鍛冶集団との関係を色濃く伝えてくれる。金属精錬・鍛冶技術にたけた渡来の秦氏の影が見え隠れする。

こじつけかもしれないが、製鉄技術伝来の空白の瀬戸内四国で古代製鉄遺跡が見つかったこととあわせ、いまだによく判らぬ製鉄技術の伝来とその開始 日本各地で伝承として残る鍛冶技術の革新と倭鍛冶から韓鍛冶技術への転換等々瀬戸内海ルートの鉄の謎を豊の国が謎を解き明かしてくれるのかもしれない。

また、もうひとつ 空白の島根・石見 そして越の鉄そして 東国の鉄がペールを脱げば・・・・・・・・・・ 思いがけない九州旅行での「古代 鉄の道」の発見に今 興味津々である。

2006.7.1. Mutsu Nakanishi

7. 九州の旅 アルバム 九州 古代の豊の国から阿蘇へ 2006. 6. 4. -6. 5.

古代鉄のルーツにつながる鉄の国「豊（豊前・豊後）」 臼杵石仏を作らせたのは炭焼き長者 ???

【 完 】

1. 九州の旅 アルバム - 豊の国から阿蘇へ - 2006. 6. 4. -6. 5.
 1. 1. 豊前 宇佐神宮 -古代から謎の多い宇佐神宮-
 1. 2. 豊後 臼杵石仏 自然の中の磨崖仏に感動 .
 1. 3. 由布院からやまなみハイウェイを通して 阿蘇火口東側壁展望台へ
2. 古代 豊の国と和鉄の道宇佐 神宮・臼杵石仏は畿内大和と結びついた渡来の製鉄集団が残した足跡
 2. 1. 豊の国は大和が九州勢力を排して 大陸・朝鮮半島と交流する拠点
 2. 2. 宇佐神宮と朝鮮半島鍛冶集団との関係
 2. 3. 臼杵石仏と真名野長者 - 製鉄伝承「炭焼き長者」-
 2. 4. 大陸と大和を結ぶ古代 瀬戸内の要衝 四国高縄半島で古代の製鉄遺跡が発掘された

【参考資料】

- ◆ 長嶺正秀著「筑紫政権から大和政権へ 豊前石塚山古墳」
- ◆ Country Walk IV
山岳宗教の歴史を秘めた霊峰 英彦山
<http://mutsu-nakanishi.web.infoseek.co.jp/pdfwalk/4walky01.pdf>
- ◆ 和鉄の道V-3
鉄の6世紀 北九州の装飾古墳に和鉄の道を重ねて
<http://mutsu-nakanishi.web.infoseek.co.jp/iron/5iron03.pdf>
- ◆ 司馬遼太郎著「街道をゆく 中津・宇佐のみち」